

二人の兄弟の家には奉公して働いて居る正直な好いお爺さんがありました。このお爺さんは山くも木を伐りに行くし、畠くも野菜をつくりに行つて、何でもよく知つて居ました。

.....

ある日、お爺さんは二人の兄弟に釣りの道具を造つて呉れると言いました。いかにお爺さんでも釣りの道具は、むずかしからう、と二人の子供がそう思つて見て居ました。この兄弟の家の周囲には釣竿一本売の店がありませんでしたから。お爺さんは何処からか釣針を探して来ました。それから細い竹を切つて来まして、それで一本の釣竿を造りました。「針と竿が出来ました。今度は糸の番です。」とお爺さんは言つて、栗の木に住む栗虫から糸を取りました。丁度お蚕さまのように、その栗虫からも白い糸が取れるのです。お爺さんは栗虫から取れた糸を酢に浸けまして、それを長く引延しました。その糸が目に乾いて堅くなる頃には、兄弟の子供の力で引いても切れないほど丈夫で立派なものが出来上りました。「さあ、釣りの道具が揃いました。」と言つて兄弟に呉れました。二人の子供はお爺さんが造つた釣竿を手提げまして、大喜びで小川の方へ出掛けて行きました。小川の岸には胡桃の木が生えて居る場所がありました。兄弟は鰕の居そうな石の間を見立てまして、胡桃の木のかげに腰を掛けて釣りました。

半日ばかり、この二人の子供が小川の岸で遊んで家の方へ帰つて行きますと、丁度お爺さんも木を一ぱい背負つて山の方から帰つて来たところでした。「釣れましたか。」とお爺さんが聞きますと、兄弟の子供はなつかりしたように首を振りました。賢いお魚は一匹も二人の釣針に掛りませんでした。

その時、兄弟の子供はお爺さんに釣りの話をしました。兄はゆづくり構えて釣つて居たものから釣針にさした餌は皆な鰕に食べられてしまいました。

弟はまたお魚の釣れるのが待遠しくて、ほんとに釣れるまで待つて居られませんでした。つい水の中を掻廻すと、鰕は皆な驚いて石の下へ隠れてしまいました。

お爺さんは子供の釣りの話を聞いて、正直な人の好きそうな声で笑いました。そして二人の兄弟にうう申しました。

「一人はあんまり気が長過ぎだし、まだ、一人はあんまり気が短過ぎました。釣りの道具ばかりでお魚は釣れません。」